D 112　高齢者の色彩感情の実態（第6報）－性別被服色彩嗜好の主成分分析－

山梨県立女短大　○小菅啓子　東京家政大　長塚こずえ
東京家政学院短大　今井弥生　相模女大　川村キミ子

目的　日本人の平均寿命の延びは著しく、現在では男75歳、女81歳に達し、世界でトップグループの長寿国となり、21世紀には高度高齢社会を迎えると予測されている。この高齢化の波は社会全体が直面した重要な問題である。多くの人びとは10～15年以上も老年期をすごすことになる。一方、こころの老化は年齢に関係なくやってくる。これを防ぐ方法は多方面から提案されているが、本報は被服のカラー・イメージを明らかにすることによって、適切な衣生活における色彩感情を検討する。

方法　1）対象　2）調査時期　3）場所　4）手続　第5，7報と同様　5）主成分分析、因子の解釈、意味づけ。

フェイス・シート　（1923年9月以前生まれ）

性別		老年前期	後期	職業		未既婚		世帯			住居形態	
男	女	65～74	75歳以上	有	無	未	既	1人	夫婦	他と同居	一戸建	集合
512	1023	885	650	206	1329	38	1497	237	432	866	1194	341

結果　老年期のイメージ・プロフィールは性別特性が認められたが、全般に“好きな，こころよい，似合った”が上位群であった。因子負荷量第1因子は“美しい，清潔な，こころよい”、第2因子は“地味な，似合った，好きな”、第3因子は“流行の，個性的な”で累積寄与率51.8%。因子得点の位置づけⅡ軸、Ⅲ軸は、＋＋若さ、－－老いを分ける軸と考えられる。これは「老いの意識」と「回帰願望」と解釈することができる。したがって、老年期の被服の色彩は色彩のもつ感情的意味に強く影響される。